

5. 読みと書きの教え方

その場に応じた読み方だけを

よく尋ねられることですが、「音訓はどう指導するか」ということです。一つの漢字にいくつもの音

訓がある。これをすべて教えるのかどうか、ということです。

私の漢字教育では、「一つの漢字にいくつもの音訓(つまり、読み方)がある」とは考えないのです。言葉を基にして、その言葉を表す文字としての漢字を考えるのです。

具体的に言うと、“うし”という言葉に対して“牛”という漢字を教えるのです。だから、“牛”という漢字は“うし”と読めればよいので、他の音訓は教える必要はない、という考えです。また、“ぎゅうにゅう”という言葉に対して“牛乳”という漢字を教えます。だから、この字を見て、“ぎゅうにゅう”と読めさえすればそれでよいのです。

牛と牛乳と、どちらを先に教えるか。それは、その実際に即して教えるのですから、“牛”が先になることもあれば、“牛乳”が先になることもあってよいのです。

その実物について、その実物を表す漢字を教えるのですから、どちらから教えようと、幼児にとっては、大した問題ではないのです。牛のほうが牛乳よりも易しいように思われがちですが、“牛”の実物を見ない幼児にとっては、“牛”は“牛乳”よりも決して易しいとは言えません。たびたび言うように、幼児には、目に見えないものを想像すること

コラム

部首 責

𠂔と貝の会意形声字。𠂔は束の略字。束は、木にとげの形を表した「𠂔」を加えて、“とげのある木”という意味を表した部首で、これにリ(刀)を加えると「刺(さす)」になる。刺 = 𠂔は、部首としては言うことを聞かないと刺すぞと言って“せめる”ことを表す。責は“貸した金(貝)を返せと言ってせめる”のが本義。

【積】 “責任として納入すべき稲(禾)”。税として納入すべき米はもみのままで積まれるので、“つむ”。

【績】 責と糸との会意形声字で糸を“つむぐ”。糸をつむぐ様は、せわしく責めたてているように見えるので「糸を責める」という字になった。

は出来ませんし、頭に描けないものを表す字など、幼児は関心を待つことが出来ないのです。

漢字の使命は、それが何を意味するかを人に伝えることにあります。“牛”という字を見たら、即座に、大人ならだれでも知っている動物の牛が思い浮べられれば、それでよいのです。極端に言えば、“うし”でも、“ぎゅう”でも、よいのです。

“牛乳”の場合は、“牛の乳”と読む字だという説明をせず、そのものずばり、牛乳という実体に即して“牛乳”と教えることです“牛”だけ見たのでは、何の反応も起らないようですよ。

“牛乳”の“牛”が“うし”であることを教えるのは、現実の牛(と言っても絵でもよいのです)について、それを表す“牛”という字を覚え、しかも、幼児が「この“牛”は“牛乳”の上の字と同じではないか」という発見、もしくは疑問を發した時です。

それまでは、“牛”と“牛乳”とは、関係なく教えるのが、私たちの基本的な考え方です。幼児は、牛と牛乳との実際的な関係は知らないのですから、初めからこれを関係づけて教えることは無用であり、無理でもあるのです。

音訓を教える時期

幼児は、牛と牛乳との実際的な関係を知らないように、最初は、文字の上でも、両者の共通点に気付かないでしょう。しかし、必ず、いつかは気付くはずで、両者の共通点に気付いた時が、実在である牛と牛乳との関係を教えるのに良い時です。その時「“ぎゅうにゅう”が牛の乳であるから、この言葉を表すのに“牛”という字を使って、

コラム

部首 艮

古い字形がで、人と目の会意字。見()と反対の形なので、後ろをふりかえって見ている形。“ふりかえる”が本義で、“立ち止まる”意味。

【限】 崖(𡵓)に“立ち止まる”の意味の艮とで、それ以上進まない、つまり“ここまでとかぎる”。

【根】 “立ち止まる”意味の艮と木とで、木がしっかり立っている“もと”である“ね”を表したもの。木の最も大切な部分なので「根本」は“大切なもの”。

これを)“ぎゅう”と読んでいるのだよ」と教えるのです。

これは、幼児に、発見することの喜びを与えることです。これは学問の方法と喜びを与えることに通じるものですが、単に音訓の知識を授けることは、この発見の喜びを幼児から奪ってしまうことになりません。

そればかりではありません。与えられた知識は失われやすいものですが、自ら発見したこと、もしくは疑問に対して教えられた知識は、心に深く刻まれて、なかなか忘れないものです。親は、何でも教えたがりますが、同じ知識でも、授けられたものと、自ら発見したものとは、その働き、その価値の上に大変な違いがあることを知らなければいけません。

それに、教えてもらうという受身の学習ばかりしていると、意欲のない人間に育ってしまう恐れがあります。その意味からも、出来る限り、子供自身に発見させ、発見する喜びを知らせることが、何事にも意欲をもち、能力のある人間に育てることに通じる道なのです。

書きは読みに習熟してから

「漢字を書く指導は、いつ、どのように行くか」もよく尋ねられる問題です。明治以来、漢字教育は“読み書き同時”、並行して学習することになっています。

しかし私は、“読み書き分離”“読みを書きよりも先に学習する”という考え方をとっています。

“読み”と“書き”とは、赤ちゃんの“はいはい”と“あんよ”との関係に似たところがあります。“はいはい”することによって“あんよ”の力が付いていきます。それと同じように、“読み”に習熟すれば、字形の認識が自然に深まり、書きの学習に移った場合、“書き”の学習が容易になります。ですから、「“書き”を急がず、まず“読み”の学習を十分にせよ」という考えです。

読み書き同時の学習は、はいはいの出来ない赤ちゃんがあんよをさせられるようなもので、字形についての認識がまだ出来ていないのに書かせられるものですから、苦勞ばかり多くて、書く力は付きません。今の学校教育では、読み書きを並行して進め、これを同時に完成させようとしていますが、これはそもそも無理なこと、不可能なことを

要求しているのです。しかも、こういう学習を強制していると、漢字嫌いになって、漢字力は身に付かず、果ては勉強嫌いになってしまう恐れがあります。

書きについては、どこの学校でも、書取り練習というのをやらせています。一ページに同じ字を何回も繰返して書かせていますが、書くのに意欲が出ませんから、なかなか書く力は付きません。それに、この書取り練習は、その漢字が初めて出てきたところでやるだけで、あとはさっぱりやりません。これではその時は書けるようになっても、しばらくすればすぐ忘れてしまうだけです。

表現よりもまず理解を

“読み”とは“理解”することであり、“書き”とは、“表現”することです。“表現”という行為は、十分に“理解”し、身に付いた後に、初めて、それをういて表現しようという意欲によって起るものです。

十分に理解できないうちに、それをういて表現しようという意欲など起るはずがありません。その意味でも、“書き”は“読み”の完成の上

に始められるべき学習であって、同時に行い、同時に完成を求めるべきものではないことがよく解ると思います。

まして、幼児の生活には、文章を読む生活は考えられますが、“書く”生活は考えられません。“文字表現”をしなければならない理由がないのです。

コ ラ ム

部首 弋

𠄎で、土地の境界線をはっきりさせるためにたてた“木の枝”の象形。“目じるし”“標識”(しるし)という意味を持った部首。

【代】 “かわりだというしるしを持った人”。代理人にとってはしるしが大事なので、弋と人とで“かわり”を表す。

【貸】 “次の世代へおくる財貨(貝)”という意味の会意形声字で、“遺産”が本義。“ただでゆずるお金”から“一時的にただでゆずる”こと。

【式】 工はIで長さの単位を表した指事字。定規の象形字。“工作”。式は“工作をする時の目じるし”という意味で、“手本”“ひな型”。

能力を無視した時期尚早の教育は、初めのうちだけ良いように見えても、発育が早く止り、結局はだめになってしまいます。わが国の作文教育は、明らかにその例だと思えます。内容が充実しないうちから、“表現”活動をさせても成功するはずがないのです。まして、幼稚園で“作文”教育を行っているところがあると聞いていますが、はなはだ見当違いなことで、幼稚園では文字による“表現”よりも文字の“理解”に重点を置いて、知識を吸収し、内容を充実させる学習に努めるべきだと思えます。

確かに幼児は、私たちが驚くような文を書くことがあります。しかし、それは、文章よりも、言葉の表現として受止めるべきだと思えます。

私が、当時三つか四つだった長女と、田舎道を山の方に向かって歩いて行った時、「おや、僕(四つ上の兄の言葉をまねて、そういう習慣がついていた)が歩いて行くと、お山が逃げて行くよ。僕は強いんだなあ」と言ったのです。

そう言われてみると、確かに、こちらが一步進めば向うの山は一步後退するように見えます。しかし、私たち大人は現象を常識的に頭で見て、あるがままに見ようとしません。

ですから、私たちは時々子供に教えられます。私は、この時、幼い娘に教えられた、と思いました。このように幼児の作文に、大人を驚かすような表現があっても、少しも不思議はありません。しかし、それは、子供には大人に無い見方があるからであって、作文(文章表現)が優れているわけではありません。

幼児期は、文章表現を伸ばす時期ではなくて、その基礎である“言葉による表現”を伸ばす時期です。そして、大人以上に鋭い、真実を見る目を、さらに育てるべきだと思えます。

つまり、“文章作文”ではなくて“口頭作文”を育てる時期です。そもそも文章は、言葉を文字で写したものですから、言葉による表現“口頭作文”を磨いておけば、文学力が身に付いた時、それをすぐに“文章表現力”に移行させることが自然に出来ると思えます。